

## クシストフ アンドリュー シプニエヴスキー

ポーランド出身

筑波大学 人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻 博士課程

### ジアディ 「Dziady 祖霊祭」



ポーランドの伝統的な祖霊祭を巡る Adam Mickiewicz の  
名作演劇「ジアディ」(part II) からのイラスト  
[https://s.ciekawostkihistoryczne.pl/uploads/2020/10/Adam-Mickiewicz\\_-\\_Dziady\\_czesc\\_I\\_II\\_i\\_IV\\_p053.png](https://s.ciekawostkihistoryczne.pl/uploads/2020/10/Adam-Mickiewicz_-_Dziady_czesc_I_II_i_IV_p053.png) より引用

暖かい夏の日思い出にしか過ぎず、厳しい冬が迫り来る頃、冬至と秋分間に、生者の世界と死者の世界の境界が薄くなる。その極点である10月31日から11月1日の夜に死者の御霊が我らの世に流れてくる。悪霊から身を守るか、煉獄をさ迷う魂を安らかにするか、又は死者からの祝福を依頼するために、かつてその夜にヨーロッパを渡り様々な面白い習慣が生じた。イギリス諸島のケルト人はサウイン(Samhain)の祭りに、死者のために各家に空いた席と食事が用意していたが、悪霊を追い払うためにお化けの形の飾りも施していた。キリスト教のヨーロッパでは、諸聖人の日の前夜(All Hallows Eve, 現代: Day of the Dead)に煉獄にさ迷う魂が救われるように、祈り及びキリスト教の普及のために命を生贄に捧げた殉教者に謝礼を上げたりされている(皆様の馴染みの Halloween は上述が数世紀に渡って合併されてきた結果である)。東ヨーロッパにおい

てスラブ人の民族はそれぞれ、ウォッカを墓に注いで死者と饗宴を楽しんだり、家で先祖のために食事とお風呂を用意したり、又は悲しい人生か激しい死に方を経験し次の世に進められない幽霊の依頼を叶えて安らかにする儀式を(キリスト教の普及後も)実施されていた。それは様々な形であっても、スラブ人の民族に渡ってその祭りの名前は「先祖の魂」に近い意味の言葉で呼ばれている(ポーランド語で: ジアディ(Dziady))。文化、言葉、習慣と宗教的な根拠はバラバラであるに関わらず、多数の文化において先祖の御霊に対して謝礼を表す祭り、つまり祖霊祭が存在することだけでも興味深い、更に気になる事に触れたいと思う。

死者に食事を挙げる、先祖者の御霊を家に誘う習慣と言えば、日本ではお盆がある。そこで私が気になるのは、なぜ日本のお盆は夏に行われているのか、である。10月下旬から11月上旬は昼が短くなり、夜は長くなりつつある。年の自然の「死」の始まり、豊かな夏と秋の収穫の終わりなどを示す。そんな時に大昔の人は死を巡る思考を自然的に抱いていたこと、そして、そんな思考が生み出す恐怖か絶望の感情を追い払うために儀式か祭りを実施し、先祖に守られることで、納得して春を待つ我慢ができたことは想像に難くないであろう。では、なぜお盆は真夏に行われているのであろう。あいにく、その原点である関連の物語を調べてみても、説明は見つけられなかった。だが、このように極めて似ていても、何らかの根本的な違いにより、同時に全く違うものに見えている習慣の存在は、グローバル化に負けない文化の多様性の存在の証拠であり、素晴らしいことだと思う。